

ひだ えつこ
叔母・飛田悦子
—その牧会人生—
飛田雄一



< 目 次> (頁)

- はじめに (3)
- にじの家・信愛荘への訪問 (3)
- 自転車での根雨訪問 (5)
- 「生い立ちの記 2015 年 12 月 2 日 飛田悦子」 (6)
- 語り部として (8)
- 大江町伝道所のころ (12)
- 福知山教会のころ (14)
- 「にじの家」での暮らし (16)
- 「生きた証封筒」のなか (17)
- あとがき (32)

●はじめに

悦子おばさん。私の父（飛田道夫）の妹だ。親戚の間ではみんな「えっちゃん」と呼んでいた。私は「悦子おばさん」と言っていた。

私の母（飛田湍子）は、歳は悦子おばさんより下だが、悦子さんは母のことを「ねえさん」と呼んでいた。兄のつれあいなので、そう呼んでいた。むかしの家制度的には、そんな呼び方が普通だったのかもしれない。

悦子おばさんは、歳をとってから苦労して牧師となり、福知山教会などで牧会をした。同志社大学神学部の発行する『天上の友』次の巻に載せてくれるというので、以下の原稿を書いた。同志社大学のことを意識して書いた。意識し過ぎたかもしれない。この原稿、筆者を明示しないことになっているというので、叔母であることはもちろん書けない。客観的な記述だ。（まだ、刊行されていないので、ここに収録するのは、フィライングだが許してもらいたい。）

飛田悦子（ひだ えつこ）

一九二二年（大正十一年）六月五日、鳥取県日野郡根雨町根雨生まれ。父・飛田孫慶、母文子。六人兄妹（三男三女）の四人目の次女。兄・飛田道夫の妻が飛田湍子（鈴木浩二の娘）。

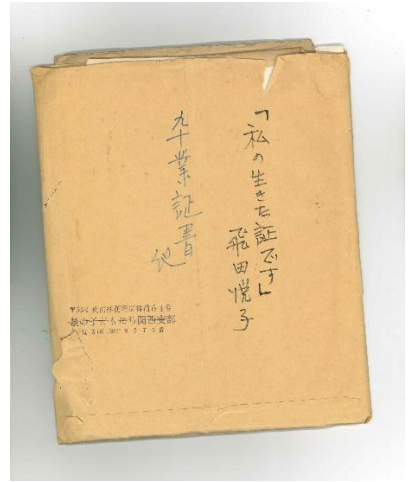
クリスチャンホームではなかったが、祖母・飛田まつが熱心なクリスチャンだった。鳥取県日野郡根雨尋常高等小学校、根雨高等女学校、大妻技藝学校卒業。卒業後、母校の根雨小学校・根雨中学校の家庭科の教師となる。

引退後、引退牧師のための婦人教職ホーム「にじのいえ」（千葉県館山市）、「にじのいえ信愛荘」（東京都青梅市）に居住。『おうめの虹』一二号（二〇一五年一二月）に、「『にじのいえ』創立について—三〇〇〇円の献金の事」を書いている。「『にじのいえ』が、東京の歴史ある青梅の『信愛荘』と合併して『にじのいえ信愛荘』となり、私は二〇一〇年六月末、館山から青梅の地に引越して参りました。『にじのいえ』に入居してからは、今年で二七年が経ちます。感謝の日々を過ごしております。（二〇一三記）」二〇二三年逝去。一〇一歳。

●にじの家・信愛荘への訪問

101 歳まで生きたので長寿だ。2012 年、私は、青梅の信愛荘につれあい（飛田みえ

子)と訪ねた。施設に事前に電話をすると「だいぶ認知がでています」とのことだった。が、実際いってみるとしっかりしている。近くのレストランで昼食をした。よく食べた。よくしゃべった。信愛荘に送り届けて帰路についたが、施設の人は「あなたが来たので元気になったみたい。いつもはそうではない」とのことだった。



2012年、青梅にじの家近くのレストラン／「生きた証」封筒

悦子おばさんは晩年、施設を移って飛田茂樹さん（私の従弟）の世話になった。茂樹さんの自宅に近い老人施設に入った。茂樹さんは、定期的に訪問をしてくれた。ありがたいことだ。茂樹さんが保管していた封筒があった。「生きた証・飛田悦子」と書かれたものだ。小学校（国民学校）の成績表、習字の表彰状から牧師資格取得書類など32枚。この冊子では巻末にそのすべてを収録する。おそらく、小学校の成績表などは（成績はともかく）、根雨町にとっても貴重な資料ではないかと思う。この冊子が完成したら、根雨町に寄贈するつもりだ。

根雨は、鳥取県日野郡日野町根雨。私の本籍は、結婚するまでここにあった。番地まで覚えている。私が小学校のころまでは実家が残っていて、正月などにときどき行っていた。私はそこで、いとこ達とよく遊んだ。毎年雪が降っていたように記憶している。雪だるまを作ったり、雪でおもちつき？をしたこともある。父の根雨自慢は、国鉄の特急列車がとまることだった。



千代は私のいとこ、悦子おばさんの上の姉（牧子）の娘／たらいに雪をいれてスコップで餅つき

●自転車での根雨訪問

2007 年、その根雨を自転車で訪ねた。根雨を流れる石見川上流、伯備線で一番標高の高い上石見駅まで輪行で行き、下った。輪行というのは、自転車を列車にのせて行くことだ。楽しいサイクリングだった。「ゆうさんの自転車／オカリナ・ブログ」にエッセイ「根雨、米子、鳥取、そして城崎にて」に書いた。



特急も停車する根雨駅／このあたりに私も遊んだ家があった。今は道路になっている。

根雨について昔の実家跡の記憶を探したが分からない。役場で番地を言ったら調べてくれた。新しい道路ができて、その家はなくなったという。実家は、むかしは立派な庄屋だったそうだが、父の父、私の祖父が「身上（しんしょう）を潰した」という。そのごは、庄屋の物置、あるいは奉公人の家に住んでいたという。私が遊んだ実家はそこだったのだ。

根雨をさらに自転車でうろうろした。飛田家はいま3件あるという。その1軒を訪ねると留守。となりの蕎麦屋で昼を食べていろいろ聞いた。飛田一族のお墓も教えてもらった。たしかにあったが、本家筋のお墓とのことだった。その蕎麦屋の安達さんは後日わざわざ電話をくださった。祖父家族は熱心なキリスト教で、祖母は奉仕活動をよくしていたという。父・飛田道夫のことも覚えている人もいたとのことだ。

悦子お婆さんは、結婚して家をでた。その結婚はうまくいかなかったようだ。お婆さんは、「生いたちの記」を書いている。以下、そのまま掲載する。

●「生い立ちの記 2015年12月2日 飛田悦子」

「私は大正11年6月5日（1922年）鳥取県日野郡根雨町根雨にて、飛田孫慶（まごよし）、文子（あやね）の6人兄妹（3男3女）の4人目の子供（次女）として生まれました。母乳は充分にあったとの事ですが、幼児期はよく病気をして『病気の問屋』と友達にからかわれていたそうです。歩くのが遅れて5才の宮参りの時、神社の石段を登れなかったとの事です。

家はクリスチャンホームではありませんでしたが、篤信な祖母（飛田まつ）が居ました。小学4年生の春、遠縁の宮下家に養女にやられました。クリスチャンホームでしたので教会学校に毎日通いました。その年の秋、実父が急死しましたが養家の都合で葬儀には行けませんでした。5年生の夏休みに帰郷した時実家の店が寂れているのが子供の目にもわかりました。

その後6年生の冬に実家はついに倒産となりました。兄、姉達は母親を伴って上京しましたが、私は根雨に残りそれぞれの生活を営みました。

私は奨学金をもらって女学校に入学し、町はずれの一軒家で祖母と二人の生活をしました。やったことのない家事一切をした事は私にとってとても大切なことでした。奨学金で上京して小中学校の家庭科教師になる専門学校に学び、卒業後母校の根雨小

学校・根雨中学校の家庭科の教師になりました。時は、大東亜戦争の最中でした。毎月1日、15日には神社参拝、授業中には『千人針』が4枚も5枚も回ってきましたから落ち着いて勉強したことは無かったと思います。

24才の時(1946年)見合結婚し大阪に嫁ぎ4月から9月までの3ヶ月間姑、小姑に仕えて過ごしました。8月の大空襲で家も私の持ち物も焼却しましたので、実家にわずかに残っていた衣類をもって鳥取に帰り、そのまま離婚になりました。当時ノイローゼになっており翌年3月まで実家で静養し、4月から福知山教会野波福太郎牧師の紹介で舞鶴の養護施設に就職しました。此の処で勤めながら3年間毎週、京都の同志社大学神学部に聴講生として通い日本キリスト教団キリスト教会の牧師の資格を得て今日に至っております。

<略歴>

昭和22年4月(1947年)～昭和43年11月(1968年) 京都府舞鶴市 養護施設双葉寮勤務

昭和43年12月(1968年)～京都府 福知山教会副牧師

昭和55年6月(1980年) 京都府大江山伝道所牧師

昭和55年7月(1980年)～昭和62年12月(1987年) 岡山県新見教会牧師

昭和63年4月(1988年)～昭和63年11月(1988年) 岡山県玉島教会牧師

昭和63年12月(1988年) 牧師引退

昭和63年12月(1988年) 千葉県館山市 にじの家入荘

ヨハネ3:16

『神はそのひとり子を賜ったほどに、この世を愛して下さった、それは御子を信ずる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。』

先の『天上の友』の原稿を書くとき、先の「生きた証」封筒の中身を丁寧にみた。同志社大学神学部に聴講にいくまでに、イヌマヌエル神学校に行っていたこと、その神学校の卒業年もそれで分かった。神学部での勉強のことだと思うが、「ラテン語の勉強がなかった」と私に言っていたことがある。私のこどものころだ。私は、ふーん、と聞いていた。もっと、びっくりして尊敬しなければならなかった、はずだ。

●語り部として

もうひとつ、2013年8月、私にきた手紙がある。「本家の歴史、飛田悦子（語り部として）」という、便箋4枚の手紙だ。欄外に、右のような文章がついてる。

本文の1頁目をそのまま以下に貼り付ける。なかなかのびのびしたいい字だ。

2013.8.13

飛田雄一様 様

夏のセミの叫びが 雑踏の木の葉にも
きこえて居ります。之れとてかき暑い日が続いております。
別紙の標本本文と直樹茂樹の所を贈ります。
貴方にも送りますので 読んで下さい。

①

本家飛田(屋号住田屋)の歴史について

悦子(語り部①②)

私がお公おはあさんご同様に 事を置き置かず
飛田家の先祖 平家(武士の名は 飛田の尊のつ)
平家は 源氏にやぶれをあた 下関にまでのがれ
渡りますが 其の時 山陽道を通る 11ヶ所と
山陰道を通る 11ヶ所がありました。
飛田の先祖は 山陰道を通り(武士の名は
月形源次郎) 四重まがりの 峠をさしぬ
時「武士やめた」(お公おはあさんの口で)
と言って この地方の長になり 1組はうが谷と
ふと組(家の先祖)は 野田(日野川の向うの山麓)
に居をかまえました。 其のふと組は
今うが谷屋(屋号大正堂)と言って居ります。
飛田の先祖(屋号住田屋)の1代、2代目
については 何も聞いていませんが 3代4代の

「本家飛田（屋号住田屋）の歴史について

悦子（語りべとして）

私がお松おばあさんから聞いたことを書き置きます。

飛田家の先祖平家（武士の名は肥田の守（ひだのかみ）〇〇）

平家は源氏にやぶれたあと下関までのがれて滅びますが、その時、山陽道を通った一群と山陰道を通った一群がありました。

飛田の先祖は山陰道を通り四重まがりの峠にさしかかった時「武士をやめた」（お松おばあさんの口ぐせ）と言って、この地方の長（おさ）になり一組はうづ谷に、ひと組（家の先祖）は野田（日野川の向う山すそ）に居をかまえました。

そのひと組は、今“うつい谷屋”（屋号大正堂）と言って居ります。

飛田の先祖（屋号住田屋）に1代、2代目については何も聞いていませんが、3代4代目の頃に1度貧乏になり（原因は不明）5代目に“五代目の五平さん”と呼ばれた人が持山からの木で下駄を作り米子まで売りに行って帰りにお金を入れて持ち帰ったという財布があのかの小さな家の神棚に置いてありました。

私の少女時代は根雨の町では“飛田カブ”と言って、4、5軒がよりつき合いをしていました。（旧家として）

本家飛田はお松おばあさんの代に、代々続けた質屋業を分家の義妹の家にゆずって（これについては又お話ししよう）、1人息子の孫慶（わたしたちの父親）は獣医と薬剤師の資格を取って、田舎では珍しい“飛田薬局、飛田書店、飛田雑貨店”の看板をかけた大きな店が、私の6年生の冬までありました。

私の4年生の秋、父親が死去、まだ成年になっていない恵一郎兄があとを継いだ時かなりの借金があったそうです。理由は、

（1）人の受け印をした事、

（2）店を大きく広げすぎたこと（店員に番頭が2人—1人は住み込み1人は通い）小僧が1人、私の小学校5年生まで居ました。恵兄、道兄、牧子姉方はこのよい時代に育ったと思います。私は4年生と5年生の夏休みまで遠縁の宮下という家に養女に行って居ました。

（3）居候の様な人が（私の感じ）いつも泊まって居た様に思います。

5年生の夏休みに父親の墓参に帰った時、子供心にも店がさびれていると思いました。

そして6年生の冬にとうとう破産して大きな家は人手に渡り、私はある町のはずれ

の小さな家に祖母さんと2人（始めは道夫兄と3人）暮らしました。恵一郎兄は東京に出てそれなりの苦労をされた様ですが、一時根雨に帰られ貞子姉はあの小さな家に嫁いで来られました。

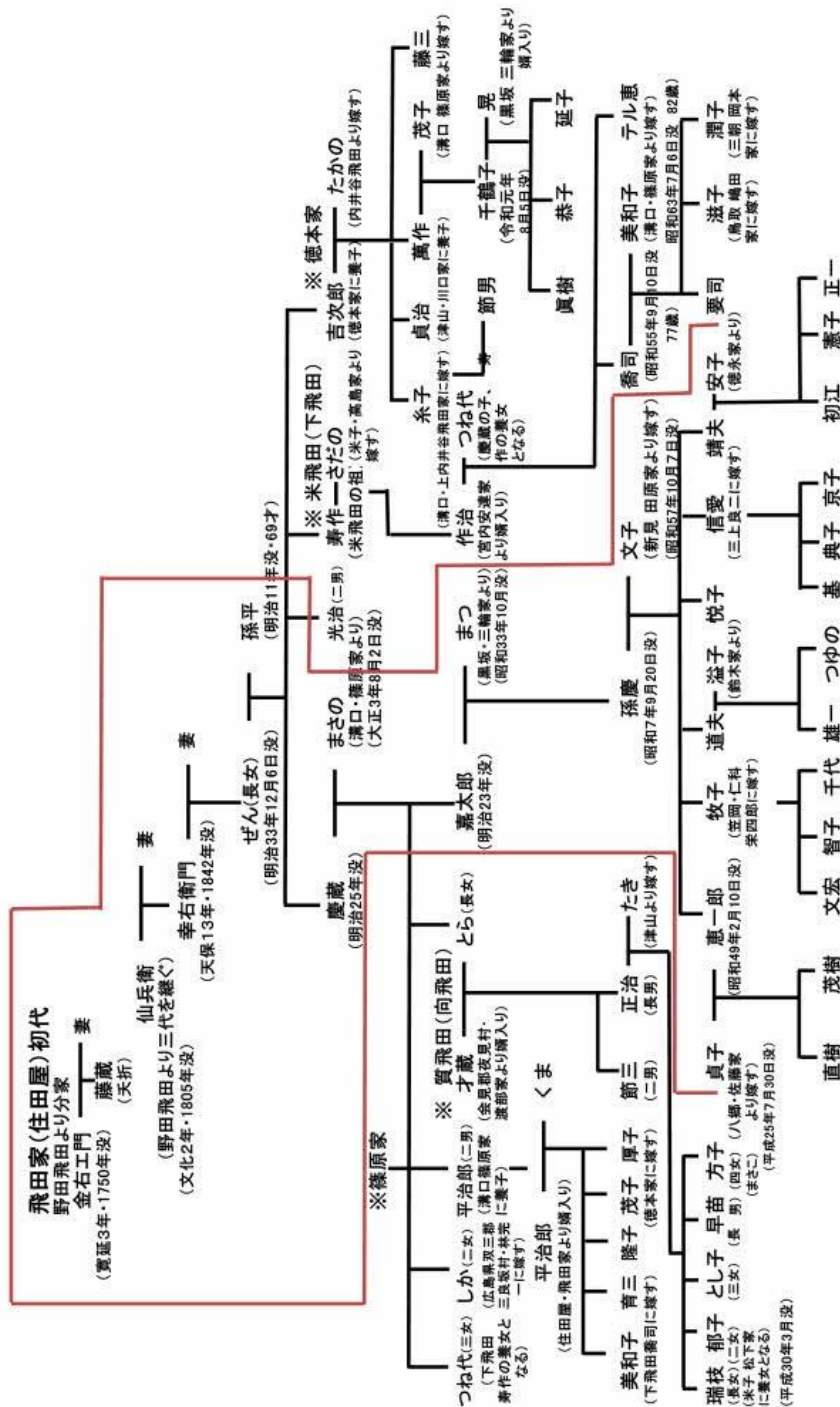
そして貴兄方2人は、其処で生れやがて又恵一郎兄が職を東京に得られたので上京して千葉県の八千代台に居をかまえ今日に至りました。八千代台で育ち少年期青年期をへてよい家庭をそれぞれに持たれた事は何よりで、貞子姉様はひい孫までだかせてもらわれて幸せでありました。

思いつくままに走り書きをしました。

〈追記〉本家住田家に対して分家住田家が2軒あって、1軒は質住田家（今は東京在住）もう1軒は米住田屋又はもうこ（乳牛をかつているから）住田家と言っていた（今は広島県呉市に在住）、2軒とも墓地は根雨にあって光徳寺の檀家である様です。」

飛田家はそれなりの歴史があったようだ。恵兄とは長男の恵一郎、道兄は飛田道夫＝私の父、貞子姉は長女。悦子おばさんを最後まで面倒みてくれた飛田茂樹さんが飛田家のすごい家系図と作ってくれている。茂樹さんは、私の父（飛田道夫）の長兄＝飛田恵一郎の息子。許可を得て以下に収録した。先のサイクリングでみつけた飛田さんのお墓もこの家系図のなかにでているのだろう。最下段のまん中ほどに「雄一」がいる。その左「千代」は神戸在住でむかし根雨でいっしょに雪で餅つきをした。その左「茂樹」が最後まで悦子おばさんの世話をしてくれてこの家系図も作ってくれた。上の列が悦子おばさんの列で、左から（年長）から貞子、恵一郎、牧子、道夫（私の父）、悦子、信愛、靖夫。靖夫おじさんが鳥取砂丘で養鶏所をしていて、その影響で私は農学部に進んだ（その後はともかく）。

飛田家系図



まつばあさんは、根雨で有名人だったようで、銅像が、「広報よなご（米子）」（2004年10月）に紹介されている。

美術館通信



《飛田まつ氏像》1934年 石膏・着色
40×25×28.5(cm)

鳥取県を代表する彫刻家 辻 晋堂

まさしく“古き良き時代の母の姿”と形容したくなるこの作品は、鳥取県を代表する彫刻家、辻晋堂（つじ しんどう／1910－1981）が24歳の頃に制作した、初期の代表作です。

昭和6年に上京、彫刻の勉強を続け、院展に初入選するなど将来を囑望されていた頃、急性虫垂炎を患い、病後一時療養のため郷里の根雨へ移った時期があります。その療養の期間にお世話になった友人達の紹介で、彼らの親をモデルに肖像彫刻を何点か制作しました。

今回紹介する作品はそのうちの一点で、当時64歳の飛田まつさんをモデルに制作され、昭和9年3月に開催された第18回日本美術院試作展へ《清水一滴氏像》とともに出品。試作賞を受賞した、辻にとっても大変重要な作品です。対象をしっかりと捉えて制作された、素朴で実直な作者の人物を伺い知ることができます。

辻自身、大正3年に実母を腸チフスで亡くしました。とても穏やかな、やさしい表情を浮かべたこの作品に、亡き母との甘やかな想い出を重ね合わせる辻青年の姿を、垣間見ることができます。

この作品は10月11日まで開催中の常設展Ⅲ「アーティストとモデルーその関係ー」でご覧いただくことができます。

■問い合わせ：米子市美術館（☎34-2424）

URL <http://www.yonago-city.jp/bunka/museum.htm>

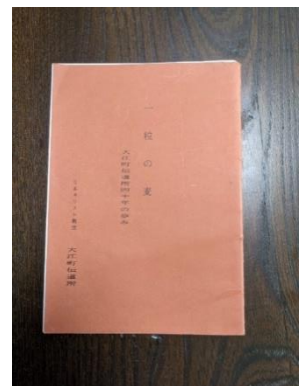
「広報よなご」（2004年10月）

●大江町伝道所のころ

悦子おばさんが1968年から1980年まで牧会をしていた福知山教会に、その後赴任した李相勳牧師は私の古くからの友人だ。彼が、悦子おばさんの文章が載っている『一粒の麦 大江町伝道所・一粒の麦一大江町伝道所四十年の歩み』のコピーを送ってくださった。以下がその全文。

「大江町伝道所の思い出 飛田悦子 古い日記帳を開いてみた。

「一九六九年五月六日。昨五日、一応の荷物を持って大江町に引越して来た。どの様な生活になるかしらと思ったが荷物もどうにか片ずいて、今静かな部屋に（この家の奥座敷らしい）一人座っている。ここを主からの働き場として与えられた。励まわばならない。主よ、お助け下さい。」大学ノートに一九六九年一月から一九七二年三月まで、折にふれて自分の足跡を記したものである。



そしてそのノートにその間の捨てがたいハガキ、手紙を沢山はさんでいる。当時、高校生が口こみで土曜日の夕方に集まり始めて、一時期は十数名集った。やがて卒業して進学、就職していった。その人達のものである。ほとんどが幼児期に、保育園で赤松先生（故美也子姉）にお世話になったという生徒であった。

土曜日は午後二時から小学生、そのあと中学生、そして高校生会を続けた。やがて高校生の集まりが少数になった。そして常時三名という集会在が長く続いたが、そのうちの二名は洗礼を受けることになった。

その間、始めは福知山教会の坂田兄が、後に荻野兄が応援してくださり荻野兄は今日まで続いている。

大人の集会は一火曜は二箇上。第二、第四が集会所で、第三が小原田という事で年間休むことなく福知山から週に二回バスで通った。

なぜかその度に大きな荷物を提げて―。南有路まで小原田から集まられるのは大変なことである。農繁期には定時が過ぎてもなかなか来会者はない。「一人して始めんとせし夕拝にバイクの音の止りてうれしき。」二週間振りに（時には一カ月振りに）会う友との語らいは、礼拝後仲々尽きない。「夕拝を終えて遠くへ帰る友、夜霧の中にエンジンの音きゆ」玄関の戸締りをして時計を見ると十二時近くになっていることが度々であった。

地区の集会の思い出も四季を通じて懐しい。田植が終ったたんぼ道をようやく乗れるようになった自転車で二箇の赤松姉宅に行く途中、ほたるが一匹スイスイと飛んでいた。思わず見とれた途端、溝に片足をはめてしまってドロドロ。春子姉宅のモンペをお借りして集会をした。

小原田では必ず一泊させてもらっての集会であった。荷物を昔の旅人の様に振り分けにして山道を登ったことも懐しいが、ここではわたしの在任中、九年間一夏も欠けくここまでが5頁>

ることなく続けた夏期学習の奉仕が今でも忘れられない。前に一回、洋牧師が神学生の時に行われているから計十回になる。前記の高校生や福知山の高校生が手伝ってくれた。三年目の夏は大江高校のOBが六名も参加してくれて毎朝の集会に讃美した声はすばらしかった。小数の信徒の方々が食料を用意し、色々お世話下さったから続いたことである。

日記帳のページを尚、繰ってみる。「同年八月十二日。十日の集会は久し振りで多くの会衆で感謝、集会后、岡代兄からキリスト教と仏教との関係について色々と質問を受けた農村での現実の厳しさを痛感する。」この夜故岡代兄はキリスト教の葬儀の事に

ついても聞かれたことを思い出す。そして生粋なお百姓であった同兄は山畑で倒れられて数日後召された。この時まだ未信徒であったちゑ姉は「お父さんの気持ちを大切にしたい。」と即、牧師に葬儀を依頼された。あの山奥の集落でのキリスト教の葬式は神武以来のこととして人々の関心を集めた。

やがて、ちゑ姉も受洗せられて集会に励んでいられる。

一九七〇年のクリスマスに受洗された谷口丈雄兄、まさ姉の親子はこの夜一回だけ礼拝に来会されただけで、やがてそれぞれの施設で今は天上の友になっておられる。

筋委縮症だった文雄兄を初めて訪問した時、年老いた母親は「どの神さんももう沢山です。」と言われた。然し同兄が「先生はキリスト教に入れば病気が癒されると一言も言わなかった」と言って受入れられ、まさ姉もそれから月一回の訪問を待ってくださる様になった。“主にまかせよなが身を・・”（讃美歌二九一）を雪にうずもれた畑の中の一軒家でよく歌った。

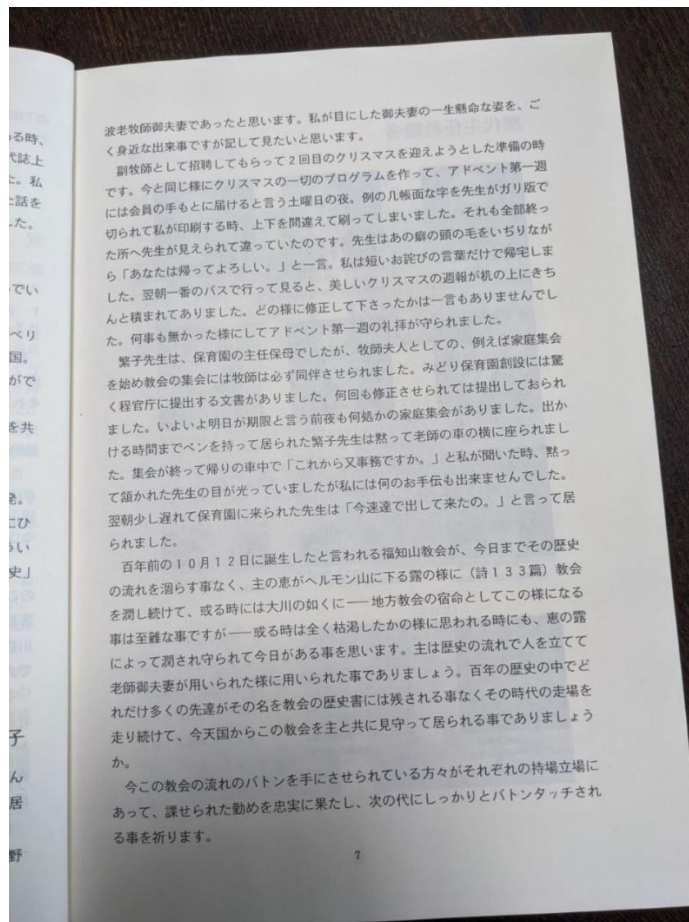
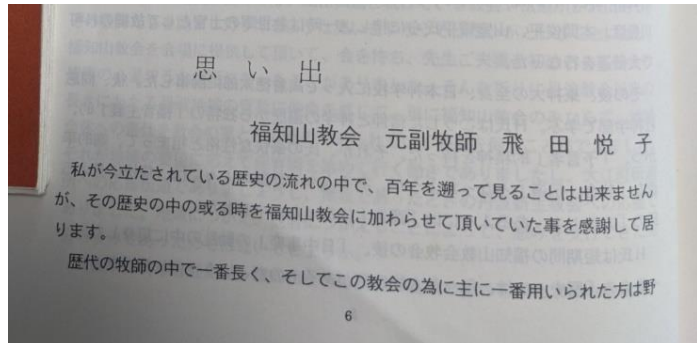
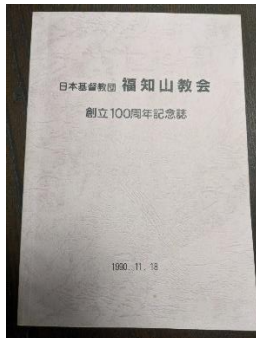
日記帳の「一九七一年十二月二十五日（この年のクリスマスはわたしはジンウエンの高熱で伏している。）高橋母娘が二人クリスマスに受洗されて感謝！CSがとて多くなつてとうとう奥の部屋の真中をカーテンで仕切って広くして使用することにした。荻野兄と美也子姉が代って一切の行事をやってくださり無事に終えた有難い！」“一粒の麦が地に落ちて死ななければただ一粒のままである。しかし、もし死んだなら豊かに実を結ぶようになる。”（ヨハネ十・二四）京都で育った一粒の麦、旧姓赤松美也子姉が戦後間もないころに郷里であるこの町に帰り、福音を伝えられてその実が今日に至っているのである。たんぽぽの穂の様に飛んで行って今、実を結んでいる人もある。創立四〇周年、出エジプトの旅を思わしめられる。民はよくつぶやいた。然し神は火の柱、雲の柱を以って導かれている。因習のかたいこの山村において、今日までこの教会を導いて下さった主が、この地で、又都会の思わところで忍耐をもってかかわっていて下さることを思いつつ、この伝道所が五十周年に向って前進されることを祈るものである。」

なかなか興味深い文章だ。書くのが好きだったようだ。

●福知山教会のころ

もうひとつ李相勁牧師は『日本基督教団福知山教会・創立 100 周年記念誌』（1990.11）を送ってくださった。そこに元牧師・飛田悦子が送った「祝辞」がある。

コピーがそのまま読めると思うので、以下に貼り付けることにする（写真を補正するソフトを以前買ったが、パソコンを更新して使えなくなった。このために再度購入するのももったいない。どなかた、補正をよろしくお願いします）。



●「にじの家」での暮らし

晩年をくらしした青梅市の「にじの家」。その機関誌『青梅のにじ』（2015.12）に寄せた文章も再録する。



1995年ごろのにじのいえ全景



飛田悦子

「にじのいえ」創立について
— 3000円の献金の事 —

1966年のことです。50年近く前の話でございます。京都で、関西6教区の婦人会の役員の研修会が持たれた時の話です。

3日間位の充実した研修会

したが、その最後の日にいくつかの分団に分かれて、集会のしめくくりがなされました。

私は一つの分団の責任者でしたが、若い人の中から議長と書記を選んで会を進めました。そして、そろそろ会が終わりに近づきました時、一人のご老人だと当時の私には思われた婦人が、関西なまりで、次のような発言をされたのです。それは「今」で話し合いされたよい話（註・婦人献身者のためのホーム設立提案は、それぞれの教会に帰ると皆教会のことで忙しく、この話は立ち消えになってしまいました。それでは残念です。今日のあかしとして献金をしました。う。」ということになりました。若い議長さんと書記さんは落ちて、自分の紙袋をあけて廻し始められたのです。私も、なにがしのものを入れたとは思いますが、心ここにあらずでした。やつと終って折りをささげる時には、もう全体会場では、閉会式の讃美歌がうたわれておりました。

この時の3000円余の献金は、委員の手をへて本部の事務所にあずけられたそうです。本部では「やっかいなものをあずかった」とのかけの声もあったと聞きました。3000円なにかして、婦人教職ホームとは、夢のまた夢でございますから。でも、事務所では指定献金として、大切に保管しておられました。ところが、その少し後、アメリカのメソジスト教会婦人部から、同じ趣旨の献金（註・2万ドル）がとけられたことをあとで聞きました。神様の時があったのです。

その後委員の方々は、ホームにふさわしい場所を探して歩かれたと聞いております。そして、ついに千葉県房総半島の先端、館山の（海の向こう）はアメリカです」という処にホームが建てられた夕方、雨上がりでした。どうか、太平洋の海から三浦半島にかけて、大きな「虹」がかかっていたそうでございます。「にじのいえ」命名の由来です。



礼拝堂

館山の「にじのいえ」には、礼拝堂、婦人教職と教職夫人の居室、食堂と客室、そして、数十人が宿泊できる研修棟がありました。夏には教会の夏期学校に、また信徒の修養会にも利用されていきました。毎週、土曜子ども聖書会が開かれ、市街地から少し離れておりまして、町の子どもは来ませんでした。近くの養護施設の子どもが、土曜日の昼は幼小组、夜は中高生が熱心に通って来ました。

やがて、私共の祈りが実って南房教会が近くの良い場所に立てられ、今日に至って居ります。「にじのいえ」が、東京の歴史ある青梅の「信愛荘」と合併して「にじのいえ信愛荘」となり、私は2010年6月末、館山から青梅の地に引越して参りました。「にじのいえ」に入居してからは、今年で27年が経ちます。感謝の日々を過ごしております。（2013記）

（にじのいえ信愛荘在住）

「感謝の日々を過ごしております」というのがいい。2012 年、私が悦子おばさんを、そこを訪ねたときもそういていた。

悦子おばさんは、私のことを「ゆうさん」と言っていた。むかしの人はよく知っている漫才の南都雄二の「男前のゆうさん」をもじってである。雄一だから「ゆうさん」だ。この冊子、悦子おばさんはどう思うだろう。きっと「ゆうさん、ありがとう」と言ってくれるのではないかと思う。

●「生きた証封筒」のなか

最後に悦子おばさんの「生きた証」封筒に入っていた卒業証書などを掲載する。大きいものは原型が A3 のものもある。ほぼ作成年順に掲載した。

この書類によって戦前の国民学校、女学校のこと、戦後のイヌマヌエル神学校のことも分かった。年表的に整理すれば以下のようなになる。

- ・ 1935年3月、根雨尋常高等小学校卒業
- ・ 1939年3月、鳥取県立根雨高等女学校卒業
- ・ 1940年3月、大妻技藝学校卒業
- ・ 1941年11月、鳥取県日野郡根雨実業専修学校勤務
- ・ 1957年4月、宗教法人インマヌエル綜合傳道団聖宣神学院卒業
- ・ 同年同月、宗教法人インマヌエル綜合傳道団婦人伝道師となる
- ・ 1968年10月、日本基督教団補教師検定試験に合格
- ・ 同年12月、同教団で準允を受け補教師登録

通知表までである。私は残していない。残念？だ。高校時代、神戸市の体操大会で一度、「平行棒」で優勝したことがある。あの表彰状だけは残しておいたらよかった。どこに行ったのだろうか。

悦子おばさんの冊子、「叔母・飛田悦子—その牧会人生—」、これで終わる。表紙写真は従弟の飛田茂樹さんがとったもので、悦子おばさんがとても気に入っていたという。すてきな写真だと思う。

歌 校

歌

島崎藤村先生遺稿集 追々新編中

一、
鹿嶋の海浜の松が城の
跡を、江戸野の海水に
真も偽りが不該

二、
歴史は成る夢醒の
舟、漕つちかひて
高きかすみの日の出の旗

流らぬ心を頼しつゝ、
漕ぎて漕ぐ心めて
なぞで船心の難はある
その名を免れしかば、同校の
名をながしし者が友と
ふるひたては、誠實に

賞狀

尋常科第六學年

飛田悦子

一三級 彝五六年部

右者本校第五回書方競技會

ニ於テ頭書ノ成績ヲ得タリ依

テ茲ニ此ノ賞狀ヲ授與ス

昭和九年八月二十日

鳥取縣日野郡川上學末

根雨高等小學校長

杉原雄治

賞狀

尋常科第六學年

飛田悦子

右本學年間

操行善良
學業優等

二付茲二褒賞ス

昭和十年三月二十四日

鳥取縣立
十年三月
高等小學校

鳥取縣日野郡根雨尋常高等小學校

鳥取縣立根雨高等女學校

通知表

昭和十年四月入學

飛田悦子

身體検査状況															毎年四月調	
学年	第一学年	第二学年	第三学年	第四学年	卒業生	全高等女學校生徒諸君平均										備考
身長	一三〇	一四〇	一五〇	一五五	一六〇	一三〇	一四〇	一五〇	一五五	一六〇	一六五	一七〇	一七五	一八〇	一八五	一八五
体重	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇
胸囲	七二	七二	七二	七二	七二	七二	七二	七二	七二	七二	七二	七二	七二	七二	七二	七二
腕囲	一七	一七	一七	一七	一七	一七	一七	一七	一七	一七	一七	一七	一七	一七	一七	一七
足長	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二
足幅	八	八	八	八	八	八	八	八	八	八	八	八	八	八	八	八
顔面	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇
容姿	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙
皮膚	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲
髪	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲
眼	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲
鼻	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲
口	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲
舌	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲
喉	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲
肺	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲
胃	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲
腸	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲
腎	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲
膀胱	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲
子宮	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲
卵巣	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲
生殖器	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲
その他	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲
備考																

學業成績															出席状況		備考	
学年	科目	修身	公民	國文	英語	算術	地理	歴史	理科	理科	理科	理科	理科	理科	出席	欠席	備考	備考
第一学年	第一學期	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	5	2	20	
	第二學期	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	4	7	59	
	第三學期	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	7	59		
第二学年	第一學期	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	5	28	20	
	第二學期	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	8	9	1	
	第三學期	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	8	59		
第三学年	第一學期	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	6	24	1	
	第二學期	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	2	88	3	
	第三學期	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	3	91		
第四学年	第一學期	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	4	8		
	第二學期	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	3	24	3	
	第三學期	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	6	92	2	
第五学年	第一學期	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	6	98	1	
	第二學期	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	3	96	1	
	第三學期	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	5	24	1	

第七五二號

卒業證書



飛田悦子

大正七年六月五日生

尋常小學校ノ教科ヲ

修了セシコトヲ證ス

昭和十年三月二十四日



鳥取縣立野郡根雨高等學校長 正六位 杉原雄治



賞狀

第一學年

飛田悦子

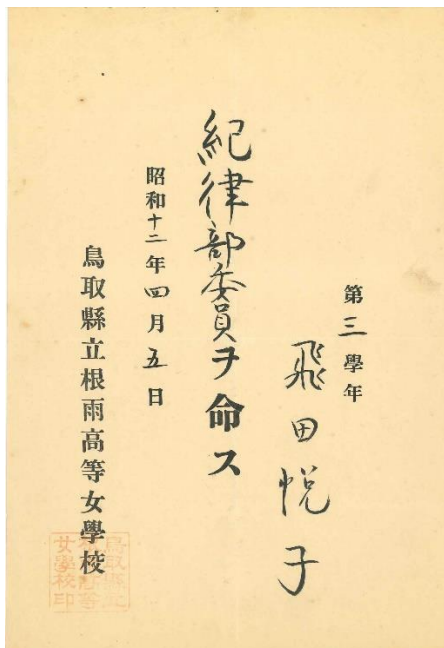
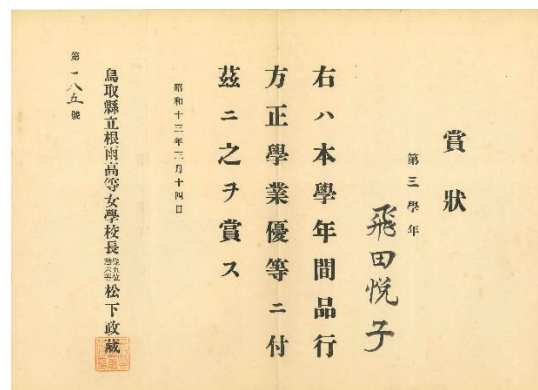
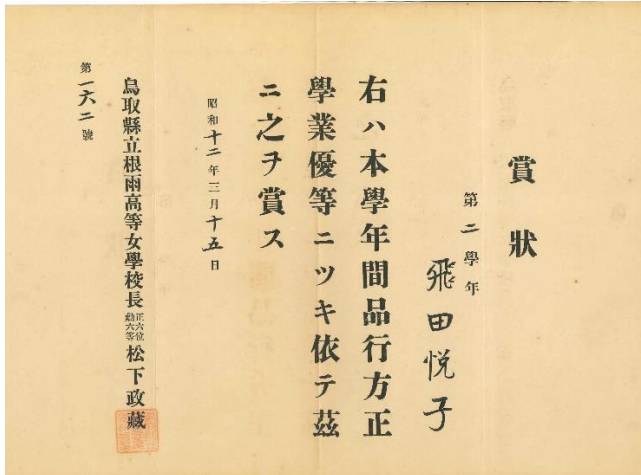
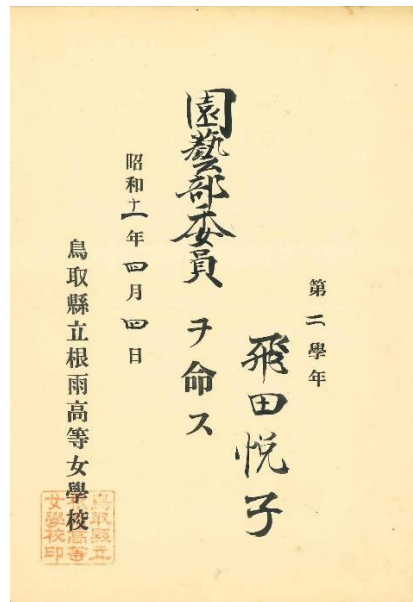
右ハ本學年間品行方正
學業優等ニツキ依テ茲
ニ之ヲ賞ス

昭和十一年三月十四日

鳥取縣立根雨高等女學校長 正六位 酒井福藏



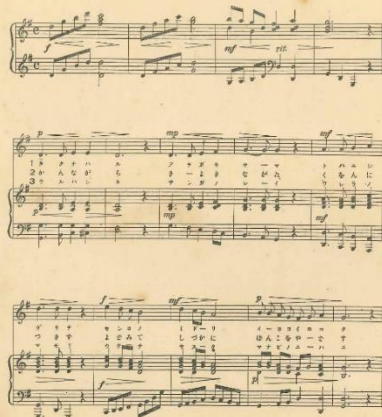
第一三〇號



校 歌

[illegible]

大阪音樂學校長 永井幸次作曲



卒業證書

飛田悦子

大正十一年六月五日生

右本校ニ於テ修業年限四箇年ノ

課程ヲ履修シ正ニ其ノ業ヲ卒ヘタリ

依テ之ヲ證ス

昭和十四年三月十三日

鳥取縣立根雨高等女學校校長松下政藏

第三〇三號

賞狀

第四學年

飛田悦子

右ハ在學四箇年間
品行方正學業優等
ニ付茲ニ之ヲ賞ス

昭和十四年三月十三日

鳥取縣立根雨高等女學校校長松下政藏

第二八號

賞狀

第四學年

飛田悦子

右ハ本學年間品行
方正學業優等ニ付
茲ニ之ヲ賞ス

昭和十四年三月十三日

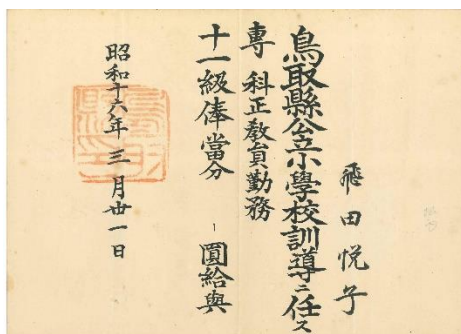
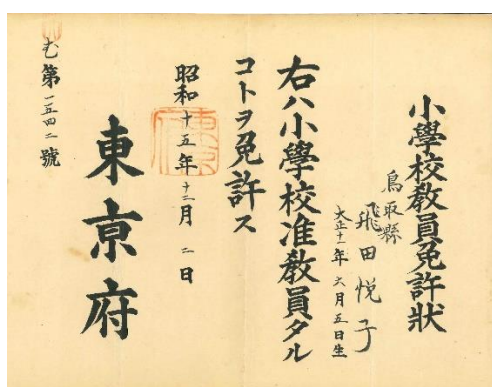
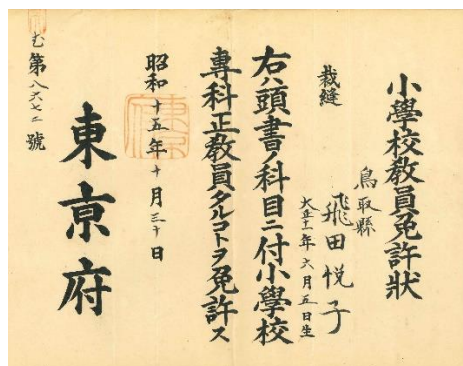
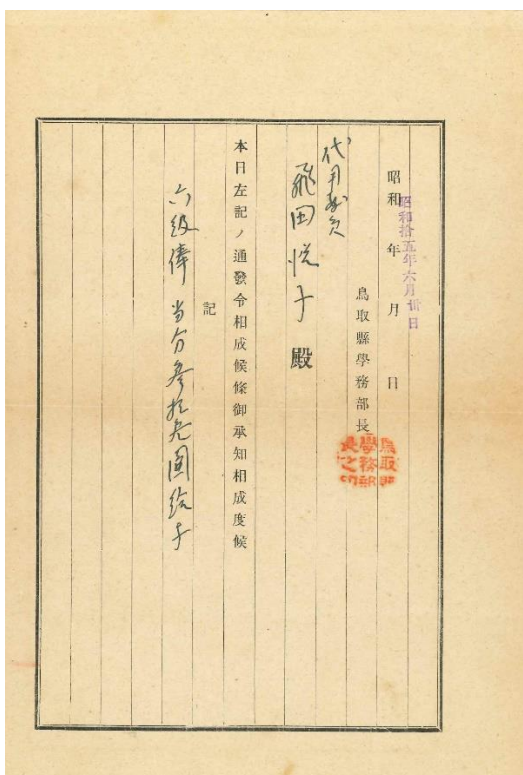
鳥取縣立根雨高等女學校校長松下政藏

第三〇三號

第四學年
飛田悦子
右ハ本學年間紀律部委員ヲ
命ス
昭和十三年 四月 七日
鳥取縣立根雨高等女學校

賞狀
學級委員長
紀律部委員
飛田悦子
右ハ生徒役員トシテ功
勞渺カラス依テ茲ニ之
ヲ賞ス
昭和十四年二月十三日
鳥取縣立根雨高等女學校

卒業證書
鳥取縣
飛田悦子
大正十一年六月五日生
右者本校ノ規程ニ依リ
頭書學科_{修業年限}課程ヲ
卒業セリ仍テ之ヲ證ス
昭和十五年三月十八日
大妻技藝學校長太妻コタチ
第二七。三號



鳥取縣公立學校訓導 飛田悦子
鳥取縣日野郡南^{尋常}高等小學校訓
導ニ補ス
昭和十八年三月廿一日
鳥取縣

鳥取縣國定學校訓導 飛田悦子
願ニ依リ本職ヲ免ス
昭和十八年三月廿日
鳥取縣

鳥取縣日野郡公立青年學校
訓導ニ補ス
月手當五拾圓給與
昭和十五年三月三十一日
鳥取縣

昭和三十二年四月廿五日
鳥取縣教育委員會
鳥取縣教員適格審査委員長
右の者は昭和二十一年勅令第百二十六號の規定によつて提出した書簡を審査したところ昭和二十一年十月十一日附聯合國長官司令官宛書日本教育制度ニ關スル管理政策、同月二十日附附
教員及教育關係官ノ調査、除外、認可ニ關スル件及昭和二十一年一月四日附阿公務從事ニ適
セザル者ノ公職ヨリノ除去ニ關スル件に附けてある事項に當らぬ、當であると判定する
昭和 年 月 日
鳥取縣教育委員會
鳥取縣教員適格審査委員長
鳥取縣

地方教官 飛田悦子
給三號俸
鳥取縣日野郡根西實業專修
學校勤務ヲ命ス
昭和十五年十月十五日
鳥取縣

卒業證書

飛田悦子

大正十一年六月五日生



右之者本神學院全期
訓育ノ課程ヲ正規ニ
卒エタルコトヲ證ス

昭和三年四月七日

宗教
法人イノマエ元綜合傳道團
聖宣神學院院長 蔦田二雄

第五九号

第五四号

辭令

飛田悦子

大正十一年六月五日 呈

右之者本傳道團
婦人伝道師二任ス

昭和三年四月七日

宗教
法人イノマエ元綜合伝道團
總理 蔦田二雄



第
6801
号

補
正教師検定試験合格証明書

氏名 石田悦子

大正十一年六月五日 生

右者一九六八年九月二十四日より二十七日まで四日間におわつて執行せられた日本
基督教団正教師検定試験に合格したことを証明する。

一九六八年十月三十日

日本基督教団教師検定委員会
委員長 島村 亀

京都教区

登録番号 第四三七二号

飛田悦子

大正十年 六月 五日 生

昭和四十三年十二月九日 日准允を受けられたので

補教師として登録しました

昭和四十三年十二月九日

日本基督教団

総会議長

鈴木正久



第四四七号

同意書

日本基督教団 福知山教会 教会担任教師

補教師 飛田悦子

昭和四拾参年拾壹月拾日 日付届出の日本基督教団 大江町 傳

道所職務主任者となることに同意する

昭和四拾四年壹月拾七日 日

日本基督教団

総会議長

鈴木正久



64.6.10.10d



日 本 基 督 教 団

東京都新宿区西早稲田2-3-18-31 郵便160
総務 (03)202-0541, 財務 (03)202-0543,
宣教 (03)202-0544, 広報 (03)202-0546

No.

年 月 日

1988 年 12 月 23 日

飛田 悦子 様

日 本 基 督 教 団

総会議長 辻 宣 道

あなたが長年にわたり、主の僕として宣教につく
されましたことは、主がこれを深く嘉せられると信じ
ます。日本基督教団は、今日まで伝道の業にご奉仕
くださつたことを、ここに深く感謝いたします。
今後とも貴重なお経験をもつて、教団のためにご助
言ご指導いただければ幸いです。
ご健康の上に、主の祝福が豊かでありますよう、心
よりお祈り申し上げます。

(30.9. 4,000)

●あとがき

一気に悦子おばさんのことを書きました。読んでくださりありがとうございます。「ゆうさん、ゆうさん」と小さいときからかわいがってもらったので、少しは恩返しができたと思います。この冊子が「生きた証」を残していたおばさんにふさわしい「証」になったかどうか分かりません。が、私にとっては確かな「証」です。

実は私の母方の祖母（鈴木玉子、鈴木浩二牧師の連れ合い）の妹に、佐々木アイがいます。彼女は、自費出版で『ある小さな物語—わが家のキリスト教史、寺子屋回顧—』（1986.11）を出しています。ほんとうにおもしろい本です。1930年にコロンビア大学を卒業し、戦前に自由学園の教師をしたり京都YWCAで働いたりしています。その本が絶版になっていたのも、私は2020年に思い出などを少し綴って復刻版をだしました。復刻版といっても今回の冊子のような簡易製本の冊子です。

私の家系は、女性が立派なようです（父＝飛田道夫に申し訳ありませんが父もいい父でした）。母（飛田湍子）は幼稚園の先生を長年していて、私が小学校、中学校に進むにつれて、母が「普通の母親」ではないことを知ることになりました。まさにキャリアウーマンのはしりでした。母は、一冊だけの絵本『だめはなこのはなし』を出していましたが、2004年5月、それを姉（つゆの）と自費出版しました。この絵本も絶版になっていますので、復刻をだしたいなどと考えています。祖母（鈴木玉子、私の母の母）も、大学の聖和大学の前身（前身の前身？）の神学校に、鈴木浩二と結婚する前に（その準備として？）に通っています。なかなかの人物です。

ということで、あとしばらく本冊子の続編を作りたいと考えています。引き続きおつきあいいただければ幸いです（私には「まえがき」「あとがき」のない本は、居心地が悪いです。ということで、あとがきを書かせていただきました）。

2025年4月15日 飛田雄一

叔母・飛田悦子—その牧会人生—

2025 年 4 月 20 日発行

執筆・編集・印刷・発行 飛田雄一（ひだ ゆういち）

〒657-0011 神戸市灘区鶴甲 4-3-18-205

e-mail hida@ksyc.jp
